



中村弓子

『重力と恩寵』

シモーヌ・ヴェーユ著

渡辺一民・渡辺義愛訳

春秋社

フランスの女流思想家シモーヌ・ヴェーユ（一九〇九—一九四三）のわれわれを捉えて離さぬ魅力はどこにあるのだろうか。それはまず、あくまで純粹さを追求する痛ましきまでに真摯な彼女の生き方にあるのだろうが、またその

思想の深く実践的な性格のうちにもあるのだと私は思う。実践的というのは単に、彼女が高等師範学校出のエリート中のエリートでありながら労働者の生活を実体験するためにルノー工場で働いたとか、スペイン動乱に際しては義勇軍に加わるためにいち早くスペインに出かけたとか、ドイツ軍がフランスを占領するとロンドンに渡って自由フランスのため協力したとかいうような彼女の生涯の軌跡を指すのではない。それにまた、彼女の思想がそのような体験のなまなましさを反映しているというだけの意味でもない。そうではなくて、彼女の思想が既成の思想体系や観念

や言葉（言葉というものが真にものを見て考えるためにいかに障害となることか。とくに言葉による構築物が時にとずらに支配する傾向のあるフランス的精神風土では）をご破算にして裸の現実を注視することによって生まれた思想であり、またそれに触れるものに単なる知的理解などは赦さない、賛成であれ反対であれ相手をじっとしてはいられなくさせるたちのものである、という意味で彼女の思想は実践的なのだ。（彼女の書物は読むものになにか爆弾を抱えているような感じさえ与える。遠くに投げ捨てて知らぬふりをするかそれともそれを抱えて彼女と共に殉死するか本当はそのどちらかしかないという感じを与えるのである。）

『重力と恩寵』という書物は彼女の短い生涯の晩年に当る一九四〇年からの二年間、パリ陥落と同時に逃れたマルセイユで、彼女の行き着いたキリスト教的思想を記したノートをまとめたものである。ここにその中の『人を読むこと』という一節を紹介しよう。この一節だけでも彼女の省察がいかになまの現実には深く根ざしたものであり、またそれゆえにこそ力強く普遍的なものに上昇してゆくたちのものであるかがわかるのではないだろうか。今ここにその重

要な部分を原文から訳出してみる。

「われわれは人を読む。しかしわれわれも他人に読まれている。そしてたがいの読みとりは交錯する。自分が読みとっているようになれと相手に強制することは奴隷状態を惹き起し、他人に自分を、自分自身が読みとっているように読めと強制することは征服を意味する。そこにあるのは一種のメカニズムであるが、それはしばしばつんぼどうしの対話である。」

「正義とは目の前の相手のうちに自分が読みとるものと相手が別ものでありうることを認めること。というより、人がそこに読みとるものと相手は別ものであること、おそらくは全然別ものであることを読みとることである。ひとはみな別ものに読みとってほしいと沈黙のうちに叫んでいる。」

ひとはみな別ものに読みとってほしいと沈黙のうちに叫んでいる。それを読みとることこそが正義だとヴェーユは言うのである。私はこの一句を初めて読んだ時の胸が熱くなる思いを忘れられない。人間を正しく評価するとはどう

いうことか。左の秤に一定の重りをのせ右に対象をのせと
いった評価の「正しさ」はここでは崩れ去ってしまう。評
価は相手を創り出す行為と不可分のものとなる。ここに
あるのは愛の遠近法のうちに見た時に「評価」というもの
とする姿なのである。

さらに先を見よう。

「ある種の注意力がない限り、この読みとりは重力に従
ってしまふ。われわれは重力によって提示される意見（人
間や出来事に対してわれわれの下す判断に与える社会的順
応主義や情念）を読みとることになる。」

重力とはこの本の題『重力と恩寵』の重力であって、わ
れわれの中にあるすべての低きにつく傾向を指している。
キリスト教の文脈で言うなら原罪というべきところであ
うが、ヴェーユの「重力」という語にはそのような教義の
言葉にない内的な実感がある。人が生きるあらゆる場面で
それは抵抗しなければ人を低みへ倒す力として働いている
のである。

ある種の注意力が働かない限り、われわれの「読みとり」

は低みへ引く重力に従ってしまうとヴェーユは言う。この
注意力とはヴェーユが現実をつねに注視したあの注意力で
もある。それはまた各人が別ものに読みとってほしいと沈
黙のうちに訴えているその叫びまでも読みとる愛の注意力
でもある。

そしてこの節の最後にこのような「読みとり」の展望の
極まる場所としてヴェーユは聖書のキリストの有名な言
葉「裁くなかれ」をもってくる。そして「裁くなかれ」と
は、われわれが到達することのできない神の裁き、神によ
る「評価」のまねびである、というのである。

このようにしてヴェーユは、われわれの周囲の人間の
「読みとり」から神の裁き（それとも神の愛というべきか）
を垣間みるどころまで一息にわれわれをひっぱってゆく。
そしてこのようにヴェーユに引き上げられて自分の周囲を
見た時なんと他人が別の姿で見えてくることか。それで私
はヴェーユの本は深く実践的であると思うと言ったので
ある。

（お茶の水女子大学・フランス文学）